

## 共同運営部門：リハビリテーションセンター

### —関係部署—

リハビリテーション科

### —概要—

リハビリテーション科ではリハビリテーション専門医1名、理学療法士19名、作業療法士7名、言語聴覚士4名、事務員1名を配し、周術期の患者さんを中心に様々な視点からリハビリテーションを実施している。(図1)



図1：リハビリテーション科スタッフ

多くの診療科の患者さんに対応したリハビリテーションを実施できるようリハビリテーション診療基準において、運動器Ⅰ、脳血管Ⅰ、心大血管Ⅰ、呼吸器疾患Ⅰの施設基準を取得している。また、2015年9月より土曜日は一日、日曜、祝日は半日の運用を開始した。

理学療法部門では救命診療科、心臓血管外科、循環器内科、脳神経外科、整形外科、外科など多くの診療科からリハビリテーションの依頼を頂いている(図2)。

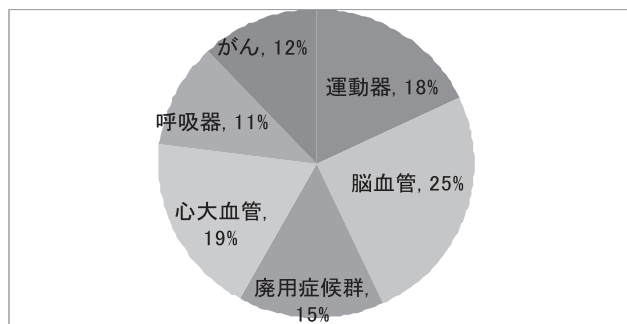


図2．疾患別依頼（理学療法）

また、呼吸サポートチーム、緩和ケアチーム、栄養サポートチーム、心臓リハビリテーションチームの構成員として院内で活動している。さらに、糖尿病患者さんの糖尿病教室や生活習慣病の教育事業にも参加し運動習慣の改善に貢献できるよう活動している。また、心臓リハビリテーションにおいて患者さんの個々の運動能力に応じて正確な運動処方が出来るようにするため心肺運動負荷試験(CPX)を定期的実施している。そして、9月より外

来心臓リハビリテーションを一部開始した。

作業療法部門では救命診療科、心臓血管外科、循環器内科、脳神経外科、整形外科、外科など多くの診療科からリハビリテーションの依頼を頂いている(図3)。

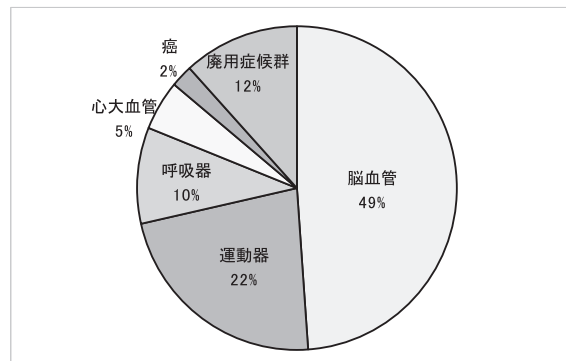


図3．疾患別依頼（作業療法）

日常生活動作の方法を安全に実施して頂けるためのパンフレット作成や福祉用具の紹介、提供などを行っている。そして、園芸療法を10月から開始した。患者さんには好評であり患者さんの離床の意欲向上に効果をもたらしたと考えている。また、褥瘡予防についても取り組んでおり、病棟スタッフと協力して患者さんのポジショニング、および院内の研修会も実施している。

言語聴覚部門では救命診療科、心臓血管外科、循環器内科、脳神経外科、外科など多くの診療科からリハビリテーションの依頼を頂いている。

患者さんの摂食嚥下機能の向上をはかるため、病棟スタッフと協力して摂食機能療法に取り組んでいる。また、栄養サポートチームの構成員として院内で活動しており、下部組織である摂食嚥下ワーキンググループへの参画、嚥下に関する研修会も実施している。摂食嚥下に難渋する患者さんに対しては嚥下造影検査を実施し患者さんに応じた食事方法の指導も実施している。脳血管障害の患者さんにおいては失語症、構音障害や高次脳機能障害に対するアプローチも実施している。また、脳血管障害の患者さん以外にも正常圧水頭症、認知症患者さんに対し医師の診断の補助的な検査も実施している。

理学療法、作業療法、言語聴覚部門では日常のリハビリテーション業務だけでなく学会などでの研究発表も実施することができた。

## —実績—

2015年4月から2016年3月の理学療法実施人数は42,695人、実施単位数は延べ70,232単位であった(図4)。

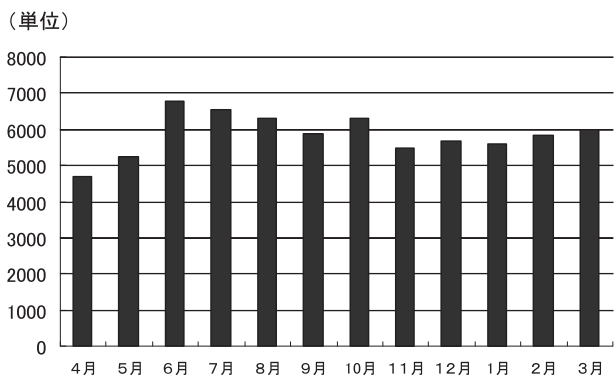


図4. 理学療法患者数(月別推移)

2015年4月から2016年3月の作業療法実施人数は18,530人、実施単位数は延べ29,475単位であった(図5)。

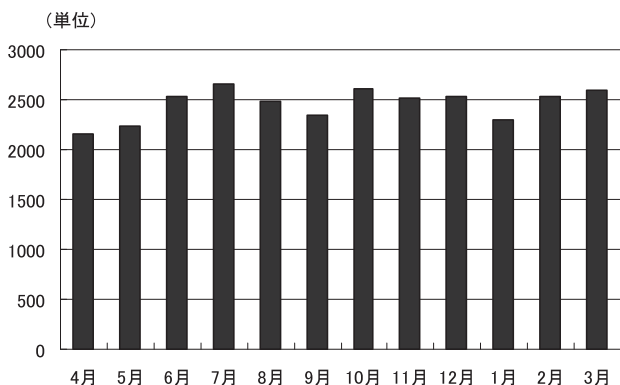


図5. 作業療法患者数(月別推移)

2015年4月から2016年3月の言語聴覚療法実施人数は7,936人、実施単位数は延べ11,927単位であった(図6)。

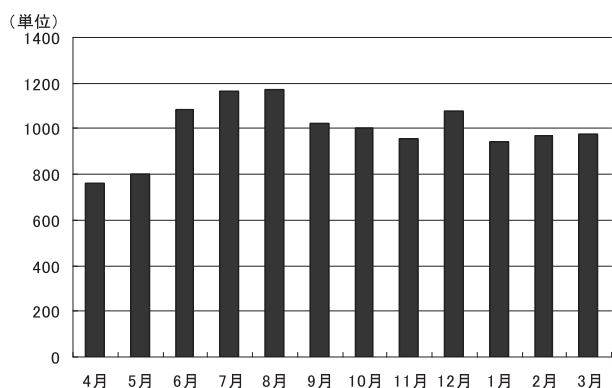


図6. 言語聴覚療法患者数(月別推移)

## —今年度の成果と反省点—

理学療法部門では今年度、外来心臓リハビリテーションの開始に向けて病棟での集団リハビリテーションや外来での心臓リハビリテーションを心臓血管センターの医師の協力のもと試行として実施してきた。看護師や薬剤師と共同した包括的なリハビリテーションを提供する体制作りが課題となった。

作業療法部門では今年度、園芸療法を取り入れて患者さんの離床意欲を向上させる取り組みを行った。季節感を感じられると患者さんから評価を得られたが、屋外に出られない人など、すべての患者さんへ提供できないことが課題となった。

言語聴覚部門では5階病棟のスタッフと協力して摂食機能療法に取り組んできた。

## —来年度への抱負—

理学療法部門では外来心臓リハビリテーションを本格的に稼働するにあたり、看護師、管理栄養士、薬剤師の協力を依頼しながら包括的なリハビリテーションを提供できる体制を整えていきたい。

作業療法部門では病棟のできるADL、しているADLの格差を補う為に、病棟と連携を深められる体制を整えていきたい。

言語聴覚部門では摂食機能療法に関して嚥下障害専門看護師の参加に備えシステムの整備を行っていきたい。

リハビリテーション科全体として来年度より病棟毎に中心となるチームを編成し、リハビリテーション科内での相談者を明確にした。これにより、安全に早期の離床が実現できるように取り組んでいきたいと考えている。